

## スペインに眠る漢籍に関する調査研究動向

林 雅 清

筆者が2011年3月に行ったスペイン各地（エル・エスコリアル、グラナダ、マドリッド、トレド）の修道院・宮殿図書館や国立図書館等に保管されている「漢籍」（中国古典籍）に関する個人調査の経過と結果について、日本・中国等に於ける当該分野の研究動向の紹介を兼ねつつ報告する。

キーワード：スペイン、図書館、漢籍、葉逢春本『三国志通俗演義史伝』、トレド本『大方広仏華嚴経』

### はじめに

2011年（平成23年）3月11日午前11時50分、筆者は関西国際空港からフィンランドの首都、ヘルシンキに向けて飛び立った。目的地であるスペインの首都マドリッドへの乗継地点である。

現地時間の同日午後3時、ヘルシンキ空港に到着すると、「ただいま日本の東北地方で大きな地震が発生したとの情報が入りました」という機内放送が流れた。筆者が耳にした、東北地方太平洋沖地震、いわゆる「東日本大震災」の第一報である。日本時間では夜の10時であるから、発生後7時間以上経ってからこの地震のことを知ったということになる。しかし、詳細は不明とのことであった。

ヘルシンキ空港に降り立つと、まず安全検査があり、その後入国審査に向かう（スペインとフィンランドは共にEU加盟国であるため、ここで入国審査がある。スペイン到着後の入国審査は無い）のだが、その間に日本の地震に関する張り紙（日本語と英語）が出ており、また、聞こえてくる日本人団体旅行客の添乗員の説明等から、やや詳しい情報を知り得た。それらの情報を総合すると、東北・関東一帯はほぼ壊滅

状態、首都圏の交通機関も全面停止とのこと。日本に電話を掛けることもできたが、仮にここで詳細情報を知り得たとして罹災した祖国の為に具体的に何かできるのかと自問した結果、遙々飛んで来たヘルシンキから何の成果も得ず、目的地にすら入らずに帰国しては、むしろ送り出してくれた所属機関や祖国に対して顔向けできぬと思い、自分には今為すべきこと・し得ることを行うべしと、自然の脅威に対する人の無力さを改めて噛み締めながら入国審査を経、スペイン行きへの便が到着する搭乗口へと向かった。

その日から8日間の日程で、スペインの首都マドリッド、マドリッド近郊のエル・エスコリアルとトレド、及びスペイン南部アンダルシア地方の都市グラナダの、図書館等に保管されている「漢籍」（中国の古典籍）の調査に赴いたが、今回はその調査報告を兼ねて、スペインに流入した漢籍に関する現在の研究動向を紹介したい。

### 1. エル・エスコリアル修道院図書館

3月11日、マドリッドのバラハス空港に到着したのは夜9時を過ぎていたため、当日はマド

リッド市街地から北に5km程のところに位置する近郊線及び長距離線「レンフェ」(renfe = スペイン鉄道)のターミナル、チャマルティン駅に隣接するホテルに宿泊し、翌朝レンフェを利用してエル・エスコリアルに向かった。

エル・エスコリアルは、マドリッドの北西の郊外に位置する、修道院(宮殿)を中心とした坂の多い町である。チャマルティン駅から列車で約1時間、マドリッドよりもやや涼しい気候で、別荘地にもなっているとのことであった。町の正式名称は「サン・ロレンソ・デル・エスコリアル」、1557年の聖ロレンソの日(8月10日)にサン・キンティンの戦いでフランス軍を破ったフェリペ2世が、その勝利を記念して、ここに修道院を建てたのが始まりという。

「エル・エスコリアル修道院」は、「エル・エスコリアル宮殿」とも呼ばれるように、修道院と王宮、さらに霊廟や教会堂、美術館、図書館が一体となった建造物であり、フェリペ2世の命によりファン・バウティスタ・デ・トレドの監督のもと1563年に建設が開始され、21年後の1584年、弟子のファン・デ・エレーラの手によって完成された(トレドは途中で死亡)。

正式には、「王立エル・エスコリアル聖ロレンソ修道院」と呼ばれる。



写真1 (エル・エスコリアル修道院入口)

レンフェのエル・エスコリアル駅を出て正面の坂を上って行くと、20分程でその修道院に到着する。

観光客用の入口(写真1)を入るとまず荷物検査があり、その先で入館券を購入する。なお、荷物検査の場所の左手には土産物売場があり、入館券購入受付の奥にはバル(BAR: 喫茶・軽食店兼居酒屋、酒・食事・会話を楽しむ社交場)がある。土産物売場はともかく、入館後すぐにバルがあり、飲食(飲酒)ができる休憩場所を設置するというのは、日本には無い発想であり、早速スペインらしさを感じた。

美術館や宮殿内部の展示、王家の霊廟、教会堂を抜けて行くと、出口を前にして左手が図書館、右手が修道院という中庭のようなスペースに出る(全ての建物は繋がっている)。



写真2 (エル・エスコリアル修道院教会堂)

写真2は、そこから振り返った教会堂の外観であり、写真の右手2階が図書館になる。

出口の左手にまた小さな土産物売場があり、その脇に図書館の入口がある。そこから入って階段を上ると、極彩色のフレスコ画が描かれたアーチ型の天井と、両側の壁一面に立ち並ぶ荘重な木製の書架が目飛び込んでくる。そこが「図書館」である。ただ、「図書館」と言ってもこの1フロアのみで、書架の前には柵が設けら

れており、一般の観光客が本を手取ることはできない。しかも、ほとんどの本が前小口だけが見える状態で書架に整然と並べられており、何の本かもわからない。表紙も背表紙も見えないように配架してあるのは、本を書架あるいはその部屋全体の単なる装飾品として展示しているに過ぎないということだろうか。ただ、研究者であることが確認されれば、別室で閲覧することが可能である。日本や中国等の図書館で必要とされる、大学図書館が発行する紹介状等の提示は要求されない。

当図書館「王立エル・エスコリアル聖ロレンソ修道院図書館」には、「天下の孤本」とも称される『三国志演義』の版本、葉逢春本『三国志通俗演義史伝』（『新刊按鑑漢譜三国志伝絵象足本大全』）の他、利瑪竇（マテオ・リッチ）の『交友論』（1601年刊）や、『資治通鑑節要』（全4冊、20巻、1541年）等、計40種を超えるタイトルの漢籍が保管されており、スペイン語の目録も存在する。全て洋装本として綴じられており保存状態も良好であるが、天地が逆に綴じられているものもあり、これまであまり多くの研究者の目には触れてこなかったことを窺わせる。

今日までにエル・エスコリアル修道院図書館を実際に訪れて漢籍調査を行った研究者には、関西大学の井上泰山氏の他、古くはフランスのポール・ペリオ、中国の戴望舒、台湾の方豪、東洋文庫の榎一雄の各氏がいる。先人の調査内容については、井上泰山氏の論考「スペイン・エスコリアル修道院蔵『三国志演義』について」（『関西大学中国文学会紀要』第17号、1996年／同氏『中国近世戯曲小説論集』、関西大学出版部、2004年再録「葉逢春本『三国志通俗演義史伝』初考」）の中で詳しく紹介されている。

なお、井上氏が1995年3月、同図書館を訪れ苦心の末に入手した葉逢春本『三国志通俗演義

史伝』のマイクロフィルムの影印は、氏による翻刻と共に関西大学出版部より公刊されている（『三国志通俗演義史伝（上）』1997年・『三国志通俗演義史伝（下）』1998年）。

葉逢春本『三国志通俗演義史伝』は全10巻の内、第3巻と第10巻が散逸しており、エル・エスコリアル図書館の目録にも記されていないが、同書の版本的価値は、井上氏の前掲論文、及び「スペイン・エスコリアル修道院蔵『三国志演義』を尋ねて」（『東方』第199号、1997年10月／同氏2004年前掲書再録）、『三国志通俗演義史伝（下）』「解説」の他、中川論「『新刊通俗演義三国志史伝』の性質」（『中国古典小説研究』第3号、1997年）、章培恒「再談《三国志通俗演義》的成書時代——以葉逢春本《三国志伝》为中心——」（『中華文史論叢』第60輯、1999年12月）、高橋乃子「關於《三国志演義》葉逢春刊本的發現及其意義」（『中国文学研究』第3輯、2000年）等に於いて論ぜられている。また、それらの内容を総括したものに、井上氏の論考「『三国志演義』研究の現状と展望」（『文化事象としての中国』、関西大学出版部、2002年／同氏前掲書『中国近世戯曲小説論集』再録）がある。

井上氏影印・翻刻の『三国志通俗演義史伝』上下巻は、中国でも2009年に上海古籍出版社から「光華文史文献研究叢書」として出版されており、『三国志演義』の版本に関する今後の更なる研究に期待される。

なお、中国に於ける葉逢春本『三国志通俗演義史伝』の影印本は、井上氏の上記の書の刊行以前、2005年に中華全国図書館文献縮複製中心から出版された『《三国志演義》古版叢刊続輯』（陳翔華主編、全14冊）の第1冊と第2冊に収録されている。第1冊巻頭に付された陳氏の論考「西班牙蔵葉逢春刊本三国志史伝瑣談」には、葉逢春本に関しては欧米の研究者が井上氏に先

立って現地エル・エスコリアル修道院図書館で入手したマイクロフィルムから影印したと記されているが、真偽の程は定かではない。

## 2. アルハンブラ宮殿図書館(グラナダ)

さて、3月12日は一日エル・エスコリアル修道院で調査活動を行い、エル・エスコリアルで一泊した。翌朝、レンフェでマドリッドに戻り、チャマルティンと並ぶレンフェのターミナル、マドリッド市街地南部にあるアトーチャ駅から、長距離線「アルタリア」(Altaría)に乗り込んでグラナダに向かった。高速鉄道「アヴェ」(AVE)は途中のコルドバまでしか走っていないため、マドリッドから4時間半かけてグラナダに到着した。

グラナダは、スペイン南部のアンダルシア地方の南東部、シエラネバダ山脈の麓に位置する、「アルハンブラ宮殿」で有名な都市である。

アンダルシア地方は、15世紀のスペイン統一まで「アル＝アンダルス」と呼ばれるイベリア半島に於けるイスラム支配領域であり、グラナダは711年にウマイヤ朝に占領されてより、後ウマイヤ朝、ズィール朝、ムラービト朝、ムワッヒド朝、ナスル朝と、1492年にキリスト教徒(カトリック)のレコンキスタ(国土回復運動)によって陥落するまで約780年の間イスラム王朝の支配下にあったため、建築物等からは今もイスラム文化の名残が感じられる。特に、現在残るアルハンブラ宮殿は、1238年建国のナスル朝「グラナダ王国」の王宮として建築されたものであり、後にキリスト教の手が入るものの、イスラム建築は残されたままである。

歴史的に見ると、イスラム王朝の多くはユーラシア大陸の中央、すなわち、東西交易の中心に位置していたことから、漢籍の西欧流入にも

何らかの影響があったのではと考え、今回スペイン＝イスラム王朝最後の都市でもあるグラナダのアルハンブラ宮殿内にある図書館を調査しようと赴いたが、残念ながらその日も翌日も開館しておらず、単独で調査に赴いたこともあって蔵書の調査が叶わず、漢籍の有無も確認できなかった。



写真3 (アルハンブラ宮殿図書館入口)

ただ、スペインのマドリッド自治大学東アジア研究センターが中心になって調査・作成したスペイン各地の図書館等に所蔵されている漢籍の目録『西班牙図書館中国古籍書誌』(杜文彬・呉雲・(西) 菲薩克主編、上海古籍出版社、2010年)には同図書館に関する情報は記されていないし、かつて台湾の学者・方豪氏が、スペインとポルトガル各地の図書館等を調査してまとめた漢籍の書誌目録「流落於西葡的中国文献」(『方豪六十自定稿』、台湾学生書局、1969年)にも「グラナダ」という地名は現れない。すなわち、同図書館に漢籍が所蔵されている可能性は極めて低いということである。しかし、『西班牙図書館中国古籍書誌』には、最後に紹介するトレド聖堂参事会図書館の情報も収録されていない(方豪氏の目録には記されているが)ことから、実際に現地に行って調査し詳細を確認するまでは、目録に採られていないからといっ

て「無い」と断言することはできない。

### 3. スペイン国立図書館 (マドリッド)

グラナダでの図書館調査は空振りに終わったが、今回の調査旅行では漢籍の調査の他、筆者のもう一つの専門領域でもある宗教分野の調査見学も兼ねていたため、イスラム建築様式を色濃く残すアルハンブラ宮殿やグラナダ市内のカテドラル（大聖堂）などを詳細に見学し、翌14日の午後、バルセロナに飛んだ。

バルセロナでは図書館調査は行わず、宗教建築であるカテドラルやサグラダ・ファミリア聖堂、その他の教会堂等を見学し、15日にアヴェでマドリッドに戻った。

今回、マドリッドでは、主にスペイン国立図書館の調査を行った。同図書館には多くの漢籍が所蔵されており、漢籍目録も多数存在する。前掲の『西班牙図書館中国古籍書誌』と方豪氏の日録、井上泰山「スペイン国立図書館所蔵漢籍目録(古典の部)」(『関西大学中国文学会紀要』第27号、2006年/同氏『漢籍西遊記～イベリア半島漢籍調査報告～』、関西大学出版部、2008年再録)の他、同図書館が作成したスペイン語の目録もある。



写真4 (スペイン国立図書館入口)

スペイン国立図書館はスペイン最大の図書館であり、管理等も相応に厳しく、入館時に空港同様の安全検査があり、顔写真入りの利用者用身分証明書(入館証)を作成しないと中に入れてもらえない。ただ、日本の大学図書館のように紹介状の無い外部者が入館できなかったり、中国の図書館のように入館証(閲覧カード)を作成する際に費用が発生したりはせず、研究者と判れば貴重書の閲覧等に於いても優遇措置が取られているようである。地下にバルが存在することも含めて、こと図書館の利用に関しては、日本や中国に比べて圧倒的に利用者・研究者の便宜(バルは職員も利用するようであるが)が図られていると言えよう。同図書館の利用方法や内部の情報については、井上泰山「スペイン国立図書館利用体験記」(『関西大学図書館フォーラム』第11号、2006年/同氏前掲書『漢籍西遊記』再録)に詳しく紹介されている。

また、同図書館が所蔵する漢籍の中には、特に筆者の専門分野でもある通俗小説・白話小説に関する、中国や日本に現存しない貴重な版本も存在する。同図書館に保管されている中国白話小説は、以下の11点である。

- 『説岳全伝』(全6巻、1801年刊)
- 『飛龍伝』(全6巻、1805年刊)
- 『好迷伝』(全6巻、1806年刊)
- 『繡像第一才子書』(全60巻、1814年刊)
- 『繡像今古奇観』(全40巻、刊年不詳)
- 『繡像龍図公案』(全10巻、1816年刊)
- 『繡像第五才子書』(全20冊、1734年刊)
- 『第五才子水滸伝』(第10巻、1866年刊)
- 『西遊真詮』(全20巻、1696年刊)
- 『繡蔵第三才子書』(全4巻、刊年不詳)
- 『雷峯塔』(全5巻、1806年刊)

当方面の詳細情報については、井上泰山氏が管理運営するWebサイト「井上泰山研究室」(<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~taizan/>)の「資料公開」のページを参照されたい。また、同サイト内には、上記漢籍のテキストデータもアップデートされている。

#### 4. トレド聖堂参事会図書館

マドリードのアトーチャ駅から中距離線の高速鉄道「アヴァント」(Avant)を利用すれば30分程で到着する、カスティーリャ・ラ・マンチャ州の州都でトレド県の県都となっている古都トレドは、古代に於いては西ゴート王国の首都であり、中世にはイスラム教・ユダヤ教・キリスト教の文化が交錯した地でもある。

キリスト教の歴史で言えば、西暦400年に開かれた第1回トレド教会会議以降、トレド司教座がその権威を高め、後にイベリア半島全体の首座大司教座となっている。

イスラム教では、711年、ウマイヤ朝の将軍ターリク・ブン・ジヤードがこの地を征服してよりイスラム王朝の支配下に入り、後ウマイヤ朝が崩壊すると、タイファ諸国のトレド王国の首都となった。1085年、カトリックのカスティーリャ王国アルフォンソ6世による再征服後も、1492年にカトリック両王によるイスラム教徒追放まで、この地にはイスラム教徒も生活し、イスラム文化の影響が続いていたという。

また、イスラム・キリスト両教の支配下にあった時代を通して、この地の経済を支えていたのはユダヤ人であったことから、ユダヤ教文化も根付いている。

なお、12～13世紀には、「トレドの翻訳グループ」と呼ばれる学者が活躍し、イスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒の共同作業によって、

古代ギリシア・ローマの哲学・神学・科学の文献がアラビア語からラテン語に翻訳され、中世ヨーロッパのルネサンスに多大な刺激を与えたとも言われている。

町全体が世界文化遺産に登録されている古都トレドには、上記の理由から、1226年にフェルナンド3世の命により建築が開始され1493年に完成したゴシック様式のカテドラルを中心に、多くの宗教建築が残されている。

そのカテドラルの内部にある「トレド聖堂参事会文書保管所並びに図書館」が、今回の主な調査対象地の一つである。ただ、当図書館はカテドラルの正面入口から入ることはできず、正面に向かって右側の小道を迂回していくとその扉の一角にある片開きの扉から入ることになる。



写真5 (トレド聖堂参事会図書館入口・筆者)



写真6 (トレド聖堂参事会図書館入口拡大)

「ARCHIVO Y BIBLIOTECA CAPITULARES CATEDRAL DE TOLEDO」と書かれた小さな表札が壁に掛けられただけの同図書館の入口の扉は通常施錠されており、表札の上のインターホンで来意を告げると中に入れてもらえる(写真5・6)。カテドラル正面の受付で図書館の場所を訊ねても明確な回答は返ってこず、図書館の位置が示されている館内案内図の類も無く、カテドラルが紹介されているガイドブック等にも図書館の情報は記されていない。にもかかわらず、筆者が今回特に大きな障碍もなく同図書館に辿り着けたのは、2005年9月に同図書館を一度調査している井上泰山氏の「道案内」があったことである。その「道案内」は、井上氏の「トレド聖堂参事会図書館の蔵書について」(『関西大学文学論集』第56巻第2号、2006年/同氏前掲書『漢籍西遊記』再録)にある。

この井上氏の論考によれば、数点存在するトレド聖堂参事会図書館の蔵書目録の内、1977年作成の『トレド大聖堂の典礼に関する手稿本の蔵書目録』(CATALOGO DE LOS MANUSCRITOS LITURGICOS DE LA CATEDRAL DE TOLEDO)に記載されている、「セラダ枢機卿文庫」(LA COLECCION DEL CARDENAL ZELADA)の中に漢籍が含まれていることが、判明している。同図書館のセラダ文庫に現在保管されている漢籍は、以下の6点である。

- 『大方広仏華嚴經』卷第54 (1345年抄本)
- 『少微先生高明大字資治通鑑節要』第5～7卷 (明刊本)
- 『明解増和千家詩集』第3・4卷 (1574年刊)
- 『新鐫梅竹蘭菊四譜』(1620年刊)
- 『妄推吉凶弁』(1669年刊)
- 『坤輿図説』下卷 (1674年刊)

トレド聖堂参事会図書館に所蔵されている漢籍の情報については、上述の井上氏の論考の他、2011年5月6日に復旦大学で開催された、井上氏の学術講演「スペインのトレド聖堂図書館所蔵の漢籍について」(復旦大学古籍整理研究所主催、筆者通訳)の中でも、その書影と共に詳しく紹介され、同図書館に所蔵されている漢籍の版本的価値は、会場にいた複数の中国文献学者(書誌学者)によっても確認された。

井上氏は、特に『明解増和千家詩集』について詳しく検証している(「トレド聖堂参事会図書蔵『千家詩』(万暦刊本残卷)について」、『汲古』第49号、2006年/同氏前掲書『漢籍西遊記』再録)が、筆者の興味を惹いたのは『大方広仏華嚴經』の残卷である(写真7・8 = 井上氏提供)。



写真7 (トレド本『大方広仏華嚴經』卷第54)



写真8 (同上)

本書は言わずと知れた大乘經典『華嚴經』の、「泥金写本」であり、「経折本」の形態を取っている。表紙の次の葉、絵図の前に付された書牌の末尾に「至正五年乙酉十二月日 焚香 謹志」とあり（写真7）、字形も趙孟頫体で書かれていることから、本書は元の至正5年（1345年）に抄写されたものであることに間違いはなさそうである。相当古い写本であり、今後本書の版本的価値等を検証していきたい。

なお、上述したように『西班牙図書館中国古籍書誌』には同図書館の情報が掲載されておらず、同図書館に所蔵されている漢籍について詳細に調査した研究者は、或いはかつての方豪氏と井上氏以外にはまだ存在しないかもしれない。

## おわりに

今回の調査旅行は、諸般の事情により日程が非常に緊密であったこともあり、十分な調査には至らなかった。全行程で8日間、時差を含めて往復の航空便に要した3日を除けば、実質調査に充てられた期間は僅か5日間と、スペイン全土を回る時間は固より、今回訪れた5都市、4機関の調査に於いても基本情報を得る程度の調査しかできなかった。

本論中でも紹介したように、スペインには中世以来、歴史的経緯により中国から漢籍を含む文物が流入しており、中には非常に価値の高いものも存在するはずであるが、同国では英仏等の他の西欧諸国に比べて中国の古典分野に関する研究は進んでおらず、海外の研究者もそれほど多くは訪れていない。

スペイン全土の図書館に所蔵されている漢籍の情報を網羅していると謳っている上述の『西班牙図書館中国古籍書誌』には、今回訪れたスペイン国家図書館とエル・エスコリアル修道院

図書館の他、スペイン王立歴史アカデミー附属図書館、バラドリッド市立ロス・アウグスティノス・フィリピノス図書館、マドリッド王宮王室図書館、国立カタルーニャ図書館、スペイン国立人類学博物館附属古文書館、ボルハ図書館の漢籍目録のみであり、トレド聖堂参事会図書館等の情報が収録されていない点から考えても、その他にも漢籍が所蔵されているながら目録が存在せず、専門家による調査等も行われていない図書館や修道院が、まだスペインには残されている可能性もある。

トレド聖堂参事会図書館が所蔵する漢籍の詳細情報を公開している、井上氏の調査報告書『漢籍西遊記』（その他、アジューダ図書館所蔵の中国関係資料や、サラマンカに於ける漢籍調査の概要等も紹介されている）や、かつての方豪氏の前掲目録（他目録に無いものとして、セビーリャ・インディアス総合古文書館の中国文献の情報も紹介されている）等は、『西班牙図書館中国古籍書誌』を補填する資料として極めて有用であるが、今後、中国学をより充実させるためにも、イベリア半島に流入した漢籍の詳細により強い光を当て、その全貌を明らかにしていく必要がある。

また、井上氏も「国外流出資料の発掘と中国学の新たな展開～イベリア半島に於ける漢籍調査をもとにして～」（『中国学への提言——外から見た日本の中国学研究——』、第58回日本中国学会大会オムニバス講演会講演録、日本中国学会、2007年／同氏前掲書『漢籍西遊記』再録）の最後に提言されているように、「資料の存在こそが研究の方向を決定づける」ことから、「西欧各国に散在する漢籍のデータベースをできるだけ早期に構築することの必要性」を、今回の調査を通して改めて強く感じた次第である。